ほない歴史通信

創刊号

1996,12,1

ふるさとの歴史情報を満載
新しいミニコミ紙ここに誕生！

皆様に、「ほない歴史通信」第一号をお届けします。

『大子町史　通史編』上下二巻が完成してから、早くも三年余がたちました。私たちはこの間、町史編さんの残務整理を行なって参りましたが、作業のなかでいつも感じましたのは、大子という地域社会のもつ多様な歴史、そしてその豊かさでした。同時に、多様でしかも豊かな歴史が町民の皆さんの間で共有され、さらに後世にきちんと伝えられるためには、町所蔵、個人所蔵を問わず歴史資料が大切に保管され生かされなければならない、私たちは、そんなことも痛感いたしました。

中央公民館の歴史資料室と資料所蔵者、並びに町民の方々を結び付け、歴史資料の大切さを学び合えるような何かがほしい、そして大子町が歴史を生かした個性ある町へと成長するきっかけとなるような何かがつくれないか。この「ほない歴史通信」は、そうした問題意識のなかから生まれました。

文字通りささやかな通信ではありますが、大きな目標に一歩一歩近づいていけるよう息長く続けたいと思っております。

皆様からの応援、よろしくお願いいたします。

【資料紹介】
旅沢藤兵衛氏（上野宮地区）所蔵
「八溝愛林同志会云規約」

山林が町の面積の約七二％にも及ぶ大子町は優良林業地帯として有名ですが、それは、山林の維持・管理に熱心に取り組んだ先人たちの努力の賜でもあります。ことに八溝造林に先駆的な役割を果たしたのが、水戸藩第九代藩主の徳川斉昭が巡村の折に休息のため立ち寄ったことでも知られる旅沢家の人びとでした。現在、その旅沢家には多くの貴重な林業関係資料が所蔵されていますが、その一つが「八溝愛林同志会規約」です。

国有林の管理経営が軌道に乗るのは明治三二年に国有林野法が成立して以降のことでして、造林事業も同法に基づいて開始されます。大子小林区署の指導のもと、八溝山を舞台に約三三〇町歩の造林が実施されるのは明治四三年のことでした。大規模な造林であっただけに多くの困難を伴いますが、しかし他方で、造林後の撫育管理をどうすすめるか、各種の作業を行なう労働者をいかに確保するかが大きな課題となりました。

その課題に応えようと、明治四四年一一月に結成されたのが八溝愛林同志会（会長は旅沢藤治衛門）です。全一四条から成る同会規約は、その目的を「森林保護ノ実ヲ挙ゲ、労働ノ神聖ヲ貴ビ、愛林思想ヲ養成スル」（第一条）ことと謳っています。国有林の事業があるときは「専ラ之レニ従事スル」（第七条）、会の維持費として毎月四〇銭の貯金を義務づける（第八条）、などの条項もみられます。規約上の厳しい制約、役員会が決める賃金の低さなどが原因で脱会者が続出し、大正五年には解散を余儀なくされます。短期間の活動で終わりましたが、国有林事業の基礎を確立した同会の功績は大きいものでした。（斎藤）

【ふるさと写真帖】

青い目の人形

大子町立黒沢小学校には、およそ七十年前にアメリカから贈られた「青い目の人形」が大切に保管されています。

昭和二（一九二七）年アメリカから日本へ一万二千体の人形が贈られました。大子町にもいくつかはあったと思われますが、今では黒沢小の一体だけです。

全国でも二七〇体程しか残っていません。

一万二千体もあった人形はどうしたのでしょう。

この「青い目の人形」はどうして日本に贈られ、またなぜ黒沢小学校の人形は残ったのでしょうか。

二〇世紀の初め、日本人移民への反感などから、アメリカでは日本人排斥運動が起こっていました。これを心配したアメリカの親日家達は、日本とアメリカの友情を図るため、人形を贈ることにしました。日本では「日本国際児童親善会」（渋沢栄一会長）や文部省が中心になって、横浜の港に着いた人形を盛大に歓迎し、日本各地へ配りました。黒沢小学校でも多くの人が集まって歓迎しました。その時の写真が残されています。

日本からもそのお礼として、五八体の日本人形をアメリカへ贈りました。それから間もなく、昭和一六（一九四一）年、日本とアメリカは戦争になりました。この時、「青い目の人形」は憎い敵国の人形だということで、多くが焼かれたり、破かれたりしてしまいました。

黒沢小学校では、その当時勤めていた菊池博子先生が、どうしても焼く気にはなれず、図書室の本棚の裏側に隠しておきました。

やがて戦争が終わり、日本には進駐軍というアメリカなどの国の軍隊が来ました。そうすると、菊池先生はひどく汚れてしまった人形が進駐軍に見られたら、と思うとこれも心配で、まだそのまま暫く隠しておいたそうです。

やがてそんな心配もなくなり「青い目の人形は」やっと日の目を見ることができました。しかしせっかくのきれいな服は汚れ、ところどころ破けたりしていましたので、昭和四八年になって、菊池尚子先生が新しい服を作って着せ替えたそうです。

服は変わっても、本体は無事で手足も動きますし、寝かせると目をつぶるかわいい人形です。

こうして先生達の努力によって、黒沢小学校の「青い目の人形」は無事に残り、今でも学校の校長室のガラスの箱の中で青い目をぱっちりと開けて子供たちを見つめ、立派に日米親善の役目を果たしています。

（石井）

【ふるさと再発見】

ふるさとの古道を歩く

平成八年度、第一回のふるさと再発見講座は、テーマ「歴史の道・古道を歩く」のもとに「南郷街道を中心に古道を歩き、周辺の史跡や文化財を通して地域の文化への理解を深める」をねらいとしたものです。

《人々から忘れ去られようとしている古道》

人々が生活しているところには道があり、生きるために道が作られ、人々の生活を支えてきました。しかし、その道も人々の足跡が絶えた時、あるものはやがて草木に覆われて自然の中に埋没し、あるものは新しい道の開発と共にその存在が忘れられていきます。

江戸時代に大子地方と水戸を結ぶ唯一の道は南郷街道であり、大子地方の道筋であった大子から小久慈・道坂峠を経て大沢に至る道は、険しい山道であったため、現在は足跡が絶え、忘れ去られようとしています。

《南郷街道の呼称と道順について》

南郷街道という呼称は、『新編常陸国誌』の中に出てくる街道名で、「水戸ヨリ西北ニ走リテ陸奥南郷ニ達スルヲ南郷街道ト呼ビ」とあり、江戸時代の街道名として取り扱われています。陸奥南郷は現在の福島県塙町、棚倉町方面にあたります。その道順は水戸を起点として青柳、鴻巣、瓜連、部垂（現大宮町）山方、下小川を経て頃藤川下坪に入り、そこから船渡で館坪に渡り、横石坪、番所坪、塩沢坪を経て険しい道坂峠を登り、槐沢を下り、小久慈坪を経て大子に入ります。更に大子、下野宮、黒沢を経て八溝山境に至り棚倉へと向かいました。この街道は久慈川に沿った幅員の狭い険しい道であったから、公式の道ではなく、商用や一般旅行客に利用されました。

《道坂峠への道はどうして開かれたのか》

これは、今回の講座の学習の課題でもありました。南郷街道の道筋にあたる道坂は大子村（槐沢）と大沢村（塩沢）の中間にあり、その一帯は、佐竹時代には大子地方（保内地方）の金山の中心をなしていました。

水戸藩になってからも寛永年間（一六二四～四四年）に採掘が行われ、その中心をなしたのが塩沢金山でありました。金掘たちは小屋を建てて住んでいたので検地を受け、塩沢村が誕生しました。藤田東湖の巡村記録によると、塩沢村時代には一四〇軒の家があり、塩沢千軒といわれる程の盛況でありました。現在でも土に半ば埋もれた金鉱跡が随所に見られ、金山の盛衰を物語っています。

このように、南郷街道の道筋にあたる道坂一帯は、金山とかかわっており、当時の道は単に渡川を避けたいというだけではなく、採掘場で働く鉱夫等への食糧を始めとする日常用品や各種物産等の運搬の手段として利用され、人々の往来とともに人馬が通れる程度の道が開かれたものと考えられます。大子地方の道は、参勤交替による大名が往来する道ではなかったので、水戸藩としても力を入れず開発・整備は遅れました。明治三十六年に県道が開通するまでは、大子地方と水戸を結ぶ本街道として利用されていました。

講座に参加した人達は、南郷街道の中でも難所の一つとされた道坂峠に向けて、谷間の曲がりくねった起伏の多い山道を右へ左へと、かつての通行する人々の苦難の姿を思い浮かべながら歩きました。現在は街道の一部が地元の人の山仕事に利用されておりますが自然の中へ消え去ろうとしています。（小澤）

【資料館めぐり】

大宮町歴史民俗資料館

大宮町歴史民俗資料館は、町立大賀小学校の移転・新築に伴い不用となった旧校舎と敷地を利用して平成元年に開館し、現在、考古資料約三〇〇点、民俗資料約六〇〇点、古文書約五〇〇点を収蔵しています。

第一展示室は「考古と歴史」で、石器・土器・埴輪・直刀・玉川のメノウなどから明治十三年の地券まで展示され、大宮町の歴史がわかります。第二展示室には、昔から人々が日常生活に用いてきた民具類が展示され、猫ごたつ・火鉢・あんか・行灯・湯たんぽ・長持や麦わら人形まであります。

また、定期的な活動としては「古文書解読講座」があります。他には、第二土曜日の休日を利用した地域少年少女サークル活動として「ふるさと探検隊」を発足させ、小学四年生以上を対象に九回の予定で、縄文土器作り・石の旅・自分が作った土器で料理してみよう・昔話を聞く会などの活動をしています。

先年、ボランティアで募った五十数名の方の調査により『大宮の野仏とその祈り』という報告書を刊行しました。そこに集まった人々や「古文書解読講座」の方々が中心となって、平成八年六月に「大宮郷土史の会」が再発足しました。

「大宮郷土史の会」には現在五十数名が参加し、平成八年度の活動では、共同テーマとして「絵馬・奉納額調査」を、個人としては各自興味あるテーマの調査研究を進めて発表し、原稿にまとめて「機関誌」を発行するそうです。また、戦後の「いはらき」新聞に掲載された大宮町関係記事をもとに、当時の世相について理解を深めています。このように、当資料館は生涯学習の一つのセンターとしても活用されています。（野内）

【編集後記】

冬の到来を目前にして、小春日和の暖かさが嬉しい時節となりました。冬仕度の準備はお済みでしょうか。例年この時期になりますと、農家の軒下に柿や大根などが下がっているのを見かけます。自然の変化とともに生まれたものをそれぞれの季節の中で食べる。そんなところに私たちの歴史の原点があるのかも知れません。

この「ほない歴史通信」は、そうしたふるさと大子の歴史をより多くの方々と探求しようと試みるものです。そして、それにより郷土のさらなる認識と文化遺産としての資料保存の一助になればと願っています。内容的には、今回創刊号ということで取り敢えず、歴史研究のための「資料紹介」、古写真を題材にした「ふるさと写真帖」、歴史教室や現地観察のための「ふるさと再発見」、各地の資料館を紹介する「資料館めぐり」の四つのコーナーを設けましたが、今後はこのほかにも「ふるさとの文化財」コーナーや動植物を含めた自然環境に関する分野などからも題材としてさまざまなものを取り上げて行きたいと考えています。

なお、本紙の題名には、当地方がかつて陸奥国に属していたころの呼称「依上保」に由来する「保内」をひらがなで用いました。題字は、大森政夫(藤軒)氏の揮毫になるものです。

本紙の編集発行には、かつて町史編纂事業に携わられた四人の先生方と事務局一人が当たります。季刊発行を予定しておりますので、皆様のご投稿をよろしくお願い致します。（井上）

編集委員　斎藤典生（茨城大学人文学部）
野内正美（茨城県立歴史館）
石井喜志夫（元教員）
小澤園彦（元教員）
事務局　井上和司（大子町社会教育課）

編集発行　大子町立中央公民館歴史資料室
久慈郡大子町大字池田二六九番地
TEL　〇二九五七－二－二六二七